サイエンスへの招待

北海道の選挙からみた政権交代
― 大正 13（1924）年の衆議院選挙 ―

東京理科大学 教養教育研究院 北海道・長万部キャンパス教養部 准教授 井上 敬介（いのうえ けいすけ）

はじめに

戦前の日本の政党内閣の中で唯一，政権交代をうけて誕生したのは，護憲三派（第一次加藤高明）内閣です．護憲三派は，憲政会（加藤），立憲政友会（高橋是清），革新倶楽部（犬養毅）の野党連合のことです．1924（大正 13）年 5 月の第 15 回衆議院議員総選挙において，護憲三派は清浦奎吾内閣の与党の政友本党（床次竹二郎）とたたかいました．政友本党とは，高橋総裁に反発する床次らが政友会を脱党してつくった政党です．優れたリーダーだった原敬（日本初の本格的政党内閣の首相）が東京駅で暗殺されてから，わずか 3 年で政友会は分裂してしまったのです．

さて，選挙の最大の争点は普通選挙の是非です．護憲三派は普通選挙実現を掲げ，政友本党はこれに反対しました．選挙結果を見てみますと，憲政会 151，政友本党 109，政友会 105，革新倶楽部 30，無所属 69 で，護憲三派は政友本党に圧勝しました．第 1 党は憲政会となり，総裁の加藤が首相となりました．

疑問なのは，長年対立してきた憲政会と政友会の連携が選挙戦の中でうまくいっていたのか？ということです．当時の選挙制度は小選挙区制でしたので，主に「1 対 1」の対決となります．政友本党，もしくは政友本党系無所属の候補に対して，憲政会と政友会は共闘しなくてはなりません．

本稿では，憲政会と政友会の共闘が成功していたのか，北海道を事例に考えていきたいと思います．第 15 回衆院選での北海道の結果は，憲政会 7，政友会 4，政友本党 2，無所属 3 です．無所属の中で 2 人は政友本党系，1 人は憲政会系です（定員 16）．北海道を対象とする理由として，他の地方に比べて政友本党が強いこと，革新倶楽部の候補がいないことが挙げられます．つまり，北海道では憲政会と政友会の連合と政友本党との対立構図がはっきりするのです．**【表】**を見ると，北海道には 2 人区が 4 つ（7，8，9，12 区）あり，これらの選挙区では，憲政会と政友会の共闘がより試されると思います．

それでは，**【表】**を参照しながら，地域別に北海道の選挙戦を見ていきましょう．**【表】**の中の「○」は憲政会と政友会の候補が共闘に成功し，政友本党の候補を破った選挙区，「△」は共闘に成功したものの，相手候補に敗れた選挙区，「×」は共闘に失敗した選挙区となります．

都市部（1，2，3，4，5 区）

憲政会は本来，都市部に強い政党で，その傾向は後身の立憲民政党にも受け継がれていきます．政友会のほうは原敬以来の積極政策（地方鉄道の敷設など）の効果もあり，都市部以外の地域（農村や漁村）に強固な地盤をもっています．これらのことは，北海道も例外ではありません．まず，都市部の結果から見ていきましょう．

1 区（札幌）と 2 区（小樽）では，憲政会と政友会の共闘が成功し，政友本党を破っています．両選挙区では憲政会が強いので（一柳仲次郎と山本厚三は後に民政党北海道支部長となる大物の現職候補），政友会は一歩さがって応援したのでしょうか．憲政会の一柳はたまねぎの輸出で莫大な利益を上げ，札幌市会の実力者となります．札幌実業青年会という札幌の実業界の大物を網羅した団体があるのですが，一柳は会頭でした．札幌はともかく，小樽では政友会も憲政会と互角の実力があるので，政友会は政友本党によい人材を奪われてしまい，候補がいなかったのかもしれません．これより少し前，小樽では，運河の建設をすすめる政友会と運河方式に反対する勢力の争いがありました．山本ら小樽運河反対の勢力が小樽の憲政会となりました．

【表】 第 15 回衆議院議院総選挙における北海道の候補者

選挙区	対象地域	当選者	所属	落選者	所属	結果
第 1 区	札幌市	一柳仲次郎	憲	久保平太郎	本	○
第 2 区	小樽市	山本厚三	憲	森正則	本	○
第 3 区	函館市	佐々木平次郎	無	平出喜三郎	憲	△
第 4 区	旭川市	坂東幸太郎	無	奥田千春 友田文次郎	本 憲	×
第 5 区	室蘭市	栗林五朔	本	岡本幹輔	憲	△
第 6 区	石狩支庁	岡田伊太郎	政	高島晴雄	憲	×
第 7 区	空知支庁	神部為蔵 松実喜代太	憲 政	桜井良三	本	○
第 8 区	上川，宗谷， 留萌支庁	東武 浅川浩	政 憲	中西六三郎	本	○
第 9 区	河西，釧路国， 根室，網走支庁	小池仁郎 奥野小四郎	憲 無	木下成太郎	政	△
第 10 区	胆振，浦河支庁	手代木隆吉	憲	村田不二三 木下三四彦	無 政	×
第 11 区	渡島支庁	黒住成章	政	大田半三郎	本	○
第 12 区	後志，桧山支庁	丸山浪弥 沢田利吉	本 憲	北林屹郎	憲	×

「憲」は憲政会，「政」は立憲政友会，「本」は政友本党．「無」は無所属を指す．
井上敬介『戦前期北海道政党史研究』北海道大学出版会，2019 年から作成．

現在では北海道を代表する観光名所の小樽運河ですが，政争の歴史があるのです．

対照的に，3 区（函館）と 5 区（室蘭）では，政友会との共闘が成功したにもかかわらず，憲政会の現職候補ふたりが落選しています．函館では，無所属の佐々木平次郎（政友本党系の現職候補，当選 2 回）が当選，長輪線（長万部から輪西までの鉄道）敷設にも尽力した人です．対する憲政会の平出喜三郎（2 代目）は当選 3 回の現職候補で，12 区から選挙区をかえてたたかいましたが，佐々木に敗れました．室蘭では，政友本党の現職の栗林五朔が 10 区から選挙区をかえ，憲政会の岡本幹輔（5 区の現職）を破りました．政友会時代の栗林も長輪線敷設に関与しており，長万部からだけでなく，輪西（現在の東室蘭）からも鉄道工事を行うよう，当時の首相の原敬に陳情し，認められています．栗林は登別温泉の経営や駅から温泉までの交通整備に尽力したことでも知られています．3 区と 5 区の結果は，北海道の政友本党の強力さを物語っています．

都市部でよく共闘した憲政会と政友会ですが，4 区（旭川）は別でした．初当選をはたした無所属の坂東幸太郎は，本来，憲政会の人です．憲政会の現職の友田文次郎との衝突となった背景には何があったのでしょうか．坂東の伝記によりますと，かつての友田は政友会に近く，無所属を経て憲政会に入党した経緯があるため，「自分の地位のために政党を利用する無節操な人」として，旭川の憲政会から批判があり，坂東の擁立になったとのことです．もしかすると，政友会は友田を応援していたのではないでしょうか．旭川では，坂東，友田，政友本党の奥田千春（後の旭川市長）と，三つ巴のたたかいとなり，共闘は失敗しました．激戦を制した坂東は，女性参政権実現を掲げ，民政党から当選を重ねることになります．

都市部以外の 1 人区（6，10，11 区）

旭川を例外として，都市部では共闘していた憲政会と政友会ですが，都市部以外の 1 人区では苦戦しています．

象徴的なのは 6 区（石狩支庁）で，政友会対憲政会という最悪の結果となり，政友会の現職の岡田伊太郎が当選しました．これは，岡田が政友本党に入るので

はないかという予測があり，憲政会が新人の高島晴雄を擁立したためだと言われています．結果，岡田は政友会に残ったのですが．政友会の混乱がここにも波及しています．

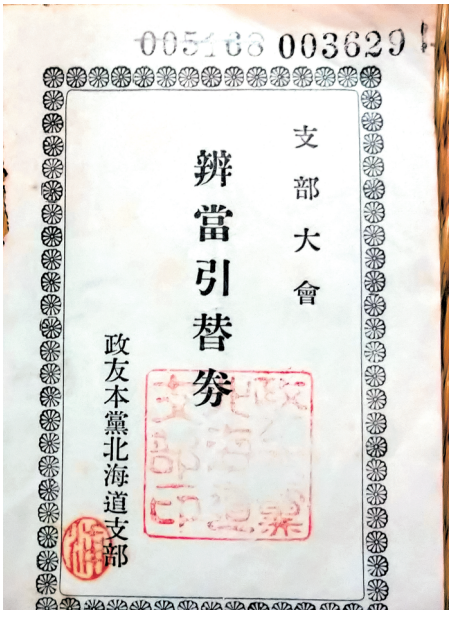
10 区（胆振，浦河支庁）でも憲政会と政友会が争っています．この選挙区は，政友本党の栗林五朔が 5 区（室蘭）に移ったので，憲政会は地元候補の手代木隆吉（伊達），政友会は木下成太郎（北海道支部長）の弟の木下三四彦と，ともに新人候補を擁立し，議席を狙いました．戦後，手代木は憲政会から「立候補する人がいないから出てくれ」と言われたと回想しています．政友本党は札幌市会の実力者，無所属の村田不二三を応援し，旭川と同じく三つ巴となりました．札幌には憲政会の一柳仲次郎がいますので，政友本党は一柳との競合（1 区）を避け，確実に村田を 10 区から当選させようとしたのでしょう（村田は前回の衆院選に政友会から立候補し，一柳に敗れています）．結果は憲政会の手代木の初当選となりました．手代木はその後も民政党の代議士として活躍します．

11 区（渡島支庁）では憲政会との共闘が成功し，政友会の現職の黒住成章が政友本党の地元候補の大田半三郎（八雲）を破りました．政友会は 3 区（函館）で，憲政会の平出喜三郎（2 代目）に譲歩しており，11 区での黒住の擁立のための交換条件だったのかもしれません．

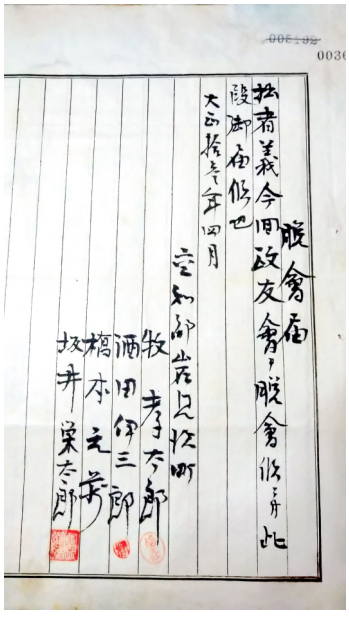
2 人区（7，8，9，12 区）

これまでは 1 人区を見てきましたが，憲政会と政友会の共闘の真価が問われるのは，2 人区です．最後に，4 つの 2 人区を見ていきましょう．

7 区（空知支庁）は憲政会の新人の神部為蔵（滝川）と政友会の現職の松実喜代太（新十津川）が政友本党の桜井良三（美唄）を破るという理想的な展開です．政友会は石黒長平（岩見沢）という現職がいたのですが，憲政会に譲歩しています．神部の地元の滝川と松実の新十津川はお隣で，すでに交通（鉄道）の要衝として市街地化が進んでいた滝川に対して，新十津川は農村です．桜井は屯田兵の出身の有力者で，美唄町長もつとめました（息子の省吾も初代市長）．現在，桜井の住宅は美唄市指定文化財となっています（旧桜井家住宅）．以前，美唄市役所にお願いして旧桜井家住宅の内部に保存されている「旧桜井家文書」を見せてもらったことがあります．その時に撮影した史料の一部が【写真 1】と【写真 2】です．【写真 1】には「政友本党北海道支部」とあります．政友本党の地方支部がなかった県もありますので，支部大会まで開催した北海道の政友本党は力があったのだと思います．【写真 1】は大会で参加者に配られた弁当の引換券です．桜井は大会の弁当担当でした．どんな弁当なのか，



【写真 1】



【写真 2】

ともに，旧桜井家住宅（美唄市）にて「旧桜井家文書」の史料群から井上が撮影．

想像すると楽しいですね．この弁当引換券ですが，けっこう残っていました．桜井たちの予想に反して，大会参加者が少なく，あまってしまったのかもしれません．【写真 2】は岩見沢の有力者たちが作成した政友会の「脱会届」（脱党届）です．美唄と岩見沢は隣町なので，桜井に合流した人たちと思われます．政友本党ができたことで，政友会は地方の人材を党外に放出していったことがわかります．

8 区（上川，宗谷，留萌支庁）は北海道最大の激戦区です．政友会は東 武，政友本党は中西六三郎という北海道を代表する政治家の直接対決となりました．ともに，当選 4 回を誇る現職候補です．青年時代の東は 1889（明治 22）年の十津川大水害（奈良県）の際，被害を受けた人たちを指導して北海道（空知地方）への移住を決行しました．そして，移住した地を新十津川と名付けたのです．その後，東は深川の菊亭農場の管理人をしていましたが，1901（明治 34）年の第 1 回道議選に当選した後，1908（明治 41）年の第 10 回衆院選に初当選，政友会の政治家としての道を歩むことになります．他方で，東は「北海タイムス」（現在の北海道新聞の前身）を経営するなど，北海道のメディアの発展に尽力しました．対する中西は札幌の弁護士の出身で，第 1 回道議選に当選したのは東と同じですが，衆院議員に初当選したのは東よりはやく，1904（明治 37）年の第 9 回衆院選です．1914（大正 3）年の第 12 回衆院選は首相の大隈重信の人気もあり，全国的に政友会は大敗しました．この時に躍進したのが憲政会の前身の立憲同志会です．当時の北海道は定員が 6 だったのですが，政友会が獲得したのはわずか 1 議席，それが中西でした．東でさえ，同志会の新人候補に惜敗しており，政友会が完全敗北を喫した選挙と言えます．そうした逆境の中で当選できる中西の実力がうかがえます．



【写真 3】　旧桜井家住宅（美唄市にて井上撮影）

東と中西は政友会の同志でありながら，犬猿の仲でした．両者の対立は 1907（明治 40）年まで，さかのぼります．港湾整備は地方鉄道敷設とならぶ，政友会の積極政策の目玉です．東は道北の石炭積み出し港として留萌への築港を政友会に要請します．これに反発したのが，留萌のお隣，増毛の人たちです．増毛は留萌に劣らぬ天然の漁港で，現在では甘えびがおいしいことで有名です．そして，増毛の人たちは衆院議員の中西を頼り，中西は増毛築港を政友会に働きかけました．留萌の東対増毛の中西，両者の対立を裁いたのが当時は内務大臣だった原敬でした．原は自ら北海道を視察し，留萌築港を決めました．当時の原の日記には，交通の面から留萌のほうが増毛よりも優れているとあります．

留萌築港を実現させた東は，地域の人々の信頼を獲得していきます．翌年の衆院選で東は初当選を果たし，1910（明治 43）年には留萌から深川（空知北部）への地方鉄道敷設を実現させました．1921（大正 10）年には増毛まで延長しています．この地方鉄道は 2026（令和 8）年に廃線となってしまった留萌本線です．留萌での港湾整備，そこに通じる鉄道敷設を通して，東は選挙で勝つための地盤をつくっていきました．東は宗谷本線（旭川，稚内間）の敷設にもかかわりました．1922（大正 11）年，東は前年に東京駅で暗殺された原を偲んでいるのですが，その内容が注目されます．稚内までは，音威子府（上川北部）から浜頓別（宗谷東部）経由で鉄道がありました．この鉄道が天北線です（1985（昭和 60）年に廃線）．東によると，原首相は北海道の広さを理由に，天北線がすでにあるにもかかわらず，東が要請した宗谷本線（留萌北部の幌延経由）の建設を独断で決定したということです．原にとっての東は政友会の積極政策の実行役だったと思います．「北海道の開発は一にも鉄道，二にも鉄道，三にも鉄道」とは東の言葉です．対照的に，中西は地方鉄道敷設による政友会の党勢拡張をうとましく思っていました．中西は，長輪線（長万部，東室蘭間）開通の際，函館の人々は政友会に感謝したが，すぐに憲政会系の市長（当時は区長）を迎え入れたことを挙げ，地方鉄道敷設が本当の意味で政友会の強化にならないと主張し

ています．中西が政友会を脱党したのは，このことが影響しているのかもしれません．

第 15 回衆院選に注目しますと，なぜ中西は東のホームの 8 区に乗り込んだのでしょうか．中西は前回の選挙で 12 区から当選しており，無理にアウェーでたたかう必要もなかったのにと思います．これには，前回選挙の事情がありました．前回選挙では，8 区から東とともに，政友会の大久保虎吉が当選しました．ところが，選挙の際，東が協定を破り，大久保の地元の名寄（上川北部）に侵入しました．大久保は苦戦し，ようやく当選したのですが，選挙違反で失格となってしまいました．失意の大久保は病死しますが，大久保を支持した人たちが中西を 8 区に迎え入れ，東の打倒をめざしたのです．政友本党としても中西の力で北海道の政友会のリーダーの東を落選させる狙いがありました．

ここで重要なのは，憲政会の現職候補の浅川浩（大久保の補欠選挙で当選）です．憲政会ははやくから普通選挙実現を掲げていました．北海道でも普選運動は高揚していましたから，浅川にとっては追い風となりました．一方，当時の東の選挙公約を見ても普選の話は全く登場しません．政友会は原時代から普選に消極的でしたが，内心では東も普選に反対していたように思います．ですが，東は浅川と組むことで，地域の人たちに対して「自分は普選に賛成だ」というイメージを持たせることに成功しました．対象的に，中西は政友本党の基本方針の「普選反対」を選挙で堂々と訴えます．結果的に，中西は普選に積極的な北海道のメディアから攻撃され，落選しました．8 区の勝利は憲政会と政友会の共闘の白眉でした．

9 区（河西，釧路国，根室，網走支庁）は道東全域という広さですが，その難しさがあったのか，憲政会の小池仁郎と政友会の木下成太郎（ともに現職候補）の間で明暗がわかれました．根室の小池はすでに 3 回の当選歴がある実力者，釧路地方が地盤の木下は当選 2 回，政友会北海道支部長です．木下は東と並ぶ大物ですが，十勝（当時は河西支庁）の地元候補の奥野小四郎（元帯広町長）に敗れました．新人の奥野は無所属ですが，実質的に政友本党の候補です．戦後，奥野は地方鉄道敷設の優先順位の決定権を木下と東が握っていることに不満を持ち，両者と対立する中西に憧れ，政友本党に加担したと語っています．



【写真 4】 冬の小樽運河（小樽市にて井上撮影）



【写真 5】 天塩川の夕陽（天塩町にて井上撮影）

最後に，12 区（後志，桧山支庁）ですが，こちらは「政友会対憲政会」ではなく，憲政会の内紛が見られました．12 区の現職は中西と平出喜三郎（2 代目）でしたので，各党は新人を擁立する必要がありました．憲政会は後志から沢田利吉（黒松内），桧山から北林屹郎（江差）をおくり，沢田が当選しました．このように，憲政会は政友会との共闘の前段階でつまずいており，地域対立が国政選にまで波及したように思います．他方，政友本党は後志から中西のかわりの丸山浪弥（岩内）が初当選しています．

おわりに

第 15 回衆院選の北海道の結果をまとめると，結果を別として，全 12 選挙区中，3 分の 2 の選挙区で憲政会と政友会の共闘が成功していました．これは中西六三郎に象徴される「共通の敵」政友本党の強さを証明しているようにも思います．

その後，護憲三派内閣は普通選挙法を制定します．戦前の普通選挙は男性に限定された不完全なものでし



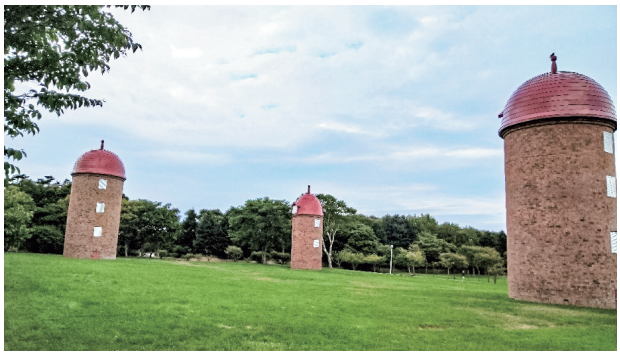
【写真 6】　ノシャップ岬（稚内市にて井上撮影）



【写真 7】　五稜郭の桜（函館市にて井上撮影）



【写真 8】　幣舞橋の夕陽（釧路市にて井上撮影）



【写真 9】　サイロ三兄弟（根室市にて井上撮影）



【写真 10】　開陽丸（江差町にて井上撮影）

たが（女性参政権が実現するのは，戦後の 1946（昭和 21 年)），日本の民主化にとって大切な一歩でした．政友本党は憲政会に吸収され（北海道では政友本党の一部が政友会に戻っています)，民政党となり，政友会との二大政党対立の時代に移行します．日本では，護憲三派内閣から 8 年間，政党内閣の時代が続くのです．1928（昭和 3 年）2 月の第 16 回衆院選は第 1 回男子普通選挙（中選挙区制）ですが，中西は民政党から 1 位当選し，復活をはたします．

選挙による政権交代，そのための野党共闘の声が根強い今日の日本の政党政治にとって，先人たちの成功も失敗も含めて「身近な歴史」に学ぶ必要があるのではないでしょうか．第 15 回衆院選はそのための重要な素材のように思います．本稿は北海道を対象としましたが，みなさんも，ぜひ，地元の図書館と郷土資料館を訪れ，「歴史上の身近な政治家」を見つけてみてください．

参考文献

井上敬介『戦前期北海道政党史研究』北海道大学出版会，2019 年.
井上敬介『立憲民政党の地方組織と北海道』吉川弘文館，2022 年.
樋口真魚，飯島直樹，大江洋代，若月剛史編『近現代日本史　幕末維新から第一次世界大戦まで』東京大学出版会，2026 年.